を詮義立てせなかつたので、胸なでおろしホットしてゐた。三人の伴の者もよろこんで禮を述べた方丈は起き上つて「さア駕籠をやつて呉れ日の暮れぬうちに歸らなければならぬ」と促すと、「ハイ〳〵お乘り下さい」「嬶大いに厄介になつた、何れ近い内にお禮に參るぞ」と立ちかかると嬶は周章た樣に「御歸りになりますか、方丈さんとやら貴僧は何れのお方でござるか」と問はれて方丈は「イヤこれは申し後れて誠にすみませぬ、愚僧は羽茂の大蓮寺でござるが、御當家は何と申しますか」「ハイ小立の重四郎と申します」方丈は始めて氣が着いた樣に「あア其重四郎さんは何處かへお出掛けですか」嬶はにこりと笑ふて「ハイ一昨年の秋遠い所へ行つたのです」「はア夫では松前へ出稼ぎにですか」「イーエ死んだのです、私は子供もありませず猫と二人暮しです」と言ふてしまつた「左樣か夫は〳〵御愁傷なことです、何れこの次に御經を讀んで上げませう」と言ひすてゝ駕籠に乘るはのつたが後に心が引かされた。これは大蓮寺が國仲へ法用に出ての歸りであつたが、此癪が不思議にも壽福寺の名の殘る動機になつたことは後にぞ知らるゝのである。方丈は寺に居つても、どういうものかお福嬶の所へ禮に行かねばすまぬと言ふよりも、行きたくてたまらなかつた、態々出掛けるのも夫も大蓮寺の方丈とも言はれるものが輕る〳〵しい行動であると、氣がとがめて夫で控へて居つたが、彼是二十日ばかりも過ぎると、又國仲に法用が出來たので大いに喜び、今度こそはと

思つて出掛けた。玉素麵三個、白足袋一足之を禮に持つて寄つた、嬶もよろこんで伴のものにまで午飯を馳走した、方丈は國仲へ行つて二晩泊つて歸りにも亦立寄つて休息したが、しみ〴〵話も出來なかつた、其後又國仲へ出たが、歸りには背合あたりへ來ると、伴の男に向ひて私は大須の五左工門へ寄らねばならぬから、お前は一足先へ戻れ、都合によると五左工門に泊らねばならんかも知れぬと言つて、先へ歸してしまつた、偖自分は五左工門も何處へも寄らずに嬶の所へ寄り、話が長くなつてツィ泊て仕舞つた、白猫は側に居つてもにやんと言はなかつた、斯樣なことが度重なつて或日方丈が來て居る處へ、名主の久右工門が突然嬶ァ家にかと訪なふて來た、この久右工門もお福に心ありで豫ね〴〵觸手を伸べて居つたのであるが、お福はいつも柳に何とやら式に體よくあしらつて居つたのであるが、久右工門は今日も觸手を伸べて試る積りで來たのであつた。二人はハッと思つたが遁げ隱れもならず、お福はこれは〳〵名主樣よく御出なさいました」と愛想よく表口へ出迎へたが、二幅前掛の其前掛腰はキリッとして目に着く風情であつた、久右工門は方丈の居るのを障子の隙からちらりと見て、オヤ道理で曖昧だと思つたらと、むつとして俄に天候激變、調子が狂つて來て「あノお福さん、この間から催促してある銀納だが、公儀から嚴しい督促でござるぞ、今日は納めて呉れるだらうのう」「ハイ名主さん誠に申譯はござらん、恐入りますが明日にもあノ河原

田へ蚤取粉をやつて錢を貰ふ所があります、それで納めますからこゝ三四日の間御猶豫を願ひたいものでござるが、今度は相違なく納めますからどうぞ」「慥だかや、今度滯ほろうものなら牢へ打ち込まれるかも知れぬぞ、夫も氣の毒だと思へばこそ、まア一つ考へたがよい、お前の心一つでノウ」左樣ならとも言はずにお福の顏を一寸一目見て、のさり〳〵と門へ出て行つた、嬶は耻かしいことを聞かれたと、顏を赤らめて內へ這つた、方丈は久右工門が行くと嬶に向ひ「督促もよいが何んだか變な言分ではないか」「いつもあの樣な氣性の人でございまさア」「さうか夫はそれとして、納めて仕舞さへすれば文句はないではないか、餘計ではあるまい何程下つて居るのだ」「ハイ」と嬶は顏を赤らめて躊躇したが、思ひ切つて「何に三百八十六文でござる」「さうか夫では是で納めてしまへ」と一分銀を一つ投げ出した。其次ぎに來た時方丈は「嬶さんどうです、是から銀納が要らぬ樣にしては」と云ふと「方丈さんそんな事が出來るものでなからうと思ひますが」「イヤ出來る屹度できる、さう仕たいやうなら私がして遣らう」「さうなるものなら誠に結構でござるが」「よしツして遣らう、夫はなア此お前の家を寺のことにして仕舞ふのだ、大蓮寺の末寺にしてやらう、さうさへすれば除地になるから銀納は要らぬのじや、幸ひあの門口の上手に地藏堂があるから都合がよいのだ、夫では斯うしよう、重四郎の重を壽にして、それにお前の名の福をとつて壽福寺と仕よう」と相談一決して方丈は夫々手續を運び、遂に重四郎を寺の事にして了つたのである。

斯く年を經るに從つて其事實が忘れられて、今日では實際の寺院の跡であると思はれる樣になつて了つたのである、其後重四郎家はどうなつたか詳かでないが、明治初年になつて其屋敷に鍛冶屋が出來て、壽福寺鍛冶と稱はれ繁昌して居る、夫から其地藏堂の下手同屋敷內義民憲盛法印と太郎左工門の大きな石塔が建てゝ有る、之は新町の善龍と云ふ者の建てたものであると云ふ。

奧平謙輔自ら信玄に擬す

河童の川流れとは之を云ふか、豪邁なりし彼の參謀さん卽ち奧平謙輔判事は武に於て、天晴なる達人、從つて馬術も勝れたる者であるが、夫がどうした機勢であつたものか、河原田町より屯所へ行く途中過つて馬から落ちて被服をすつかり泥土で汚して了つた、乃で己むを得ず着物を借るべくツカ〳〵と妙經寺へ駈け込んだ、夫が丁度方丈が檀家へ佛事に出掛ける際であつた、これを見ると方丈に向つて、予斯の如く着物を汚したから其許の其の法衣を貸されよと請ふた、方丈は實情を告げて他の着物をと言ひしも聽かれず、是非其法衣をと强請、さあこれには方丈も一方ならず閉口したが、相川で

青盤もせり場もしきも奥平、上下もんで墮落三百

と歌はれたる如き御仁であるばかりでなく、廢寺斷行家であるから後難を虞れ早速脱いで差出すと大いに喜び是を着用し馬に跨がつて進行しつゝ從者を顧みて曰く、どうじや武田信玄と其雄姿何れが勝れると（近侍したる小木の眞瀬屋翁の直談）

各地名物男の特色

世には悶然此上なき變り者が時々出來るが、誠に氣の毒なものなれども致方がないのである、然うしてこれが其變り者の本能の表現であらうが、各自が習癖又は得手と云ふ樣な變體的特色を持つてゐるのが面白いから、それを少しく擧げて見よう。

其一　新保の玉とり

安政の頃の者で、新保とは云へど實は西方村の者のそうだが、銀藏（假名）といふ男があつた。變りものゝ爲め家がつげず弟に嫁を取つて相續者とした。然るに銀藏は玉取りの名人で天晴一人前の藝人の腕を持つて居つた、其故人にも愛せられた、玉といふのは丸石で、大きな桃位の太さのもので、之を兩の袂に十四五個ばかり入れて持つてあるいて、これを十個ばかりくるくると自由自在に操つたが、其技巧イヤ手際の鮮さは見る者をして陶然たらしめたのであり、然して其玉操り歌は斯うである。

天下太平五穀成就の星下り、操り返やし操り戻す、指に附いて廻はれ、口について廻はれ、家内繁昌の御祈禱、二ツ三ツ玉、惡魔拂ひのみだれ玉、指に着いて廻はれ、こぶしに着いて廻はれ、産神樣への手向玉、此家の先祖生靈、これみてよろこびたまへ、終りに千秋樂の納め玉云々（此續き不詳）又

兄は玉とる弟は嫁とる、嫁は草取る婿は杓子とる、小木の藝妓はお酌とる云々」

この歌は誤り多からんも知るべからず修正を乞ふ

然うして銀藏が死んでから調べて見ると、此玉石を袋に納れたのを二袋、我家に置くと取られると思ふたか、近所の親類の家に預けてあつたと云ふ

其二　深浦の旦那さん

三崎の深浦に佐五二（假名）といふ變り者が明治の初年頃居つた、これが亦一風變つた中の又變り者で面白い所がある、夫は外ではない、己自らが武士即ち侍になり切つて居る、其樣の氣になつて居るのだから、自分も人も旦那さんで通つて居り、深浦の旦那さん〳〵と云ふたものである、大抵

裸體に肌帶一筋で歩いたものだが、常に腰に竹棒を二本、これを大小と心得丁半に差し、其又差振は堂に入つて甘いものであつた、道も眞中ばかり歩き、人に遇へばシツと制示し大樣に行き過ぎた座する時は板の間であらうが庭であらうがお構ひなく、しやんと御座りして體を外らし、兩手を膝の上に置き決して膝を崩して胡座をかくの、足をのばすのと云ふ樣な不行儀のことはせなかつた、言葉も其通り貴殿、其許、拙者この方などで、仲々威張つた元氣のよい男であつた、も一つ變つたことは、いかに物が慾しくても人に物を吳れよと請ふことなく、反對に人に吳れると云ふのである例へば飯が慾しい時は人に向つて、飯の三杯も喰へ澤山もつと喰へ、鉢目魚（魚名）の頭の三鉢も喰へ（魚の頭を好んで食した）と云ふたのである、而して食物を吳れると一寸禮してばく〳〵食してきツと行つた、この物を乞はぬのも侍氣質の發露であらう。

其三　籠米老僧

籠米老僧の特色は冷飯でなければ食はぬことである、冷飯を盛つてコヽメ是は冷飯ではない暖いのだぞと云ふと、イヽエぬくいのは嫌だと云ふて食はない、又暖かいのでもさア冷飯だから食へよと云へばいきが立つて居つても食ふたと云ふ。

其四　高崎の何某

高崎の鬼（假）とか鱶とかいふ恐ろしい綽名のおつさんは口の大きな事と、米俵を片手でたがくのが特色で、口に手拭を八筋も丸めて入れて平氣なのである、八筋だと一筋の手拭を二尺三寸としても、一丈八尺四寸であるから隨分量があるのだ亦一俵の米は片手で持てば肩へ上げるが兩手を掛けては持ち得ない、妙な得手もあればあつたものだ。

其五　中山の某

（昭和五年）故人になつた中山の某君は大皷の樣の鳴り物が好きで、小さな太皷でも遣らうものなら滿悅至極で、ボンコ〳〵と叩いて歩いたものであつた。君の特長としては小さい二つ三つ位の子供が好きで、隨つてあやなすことが上手であつた、泣いて居るのでも某君の手に渡れば、默つて大人しくなつて了ふ、夫はよいが時とすると飛んでもない奇劇を演出して人騷がせをしたことがある曾て莚場だか多田だか忘れたが、三つになる小兒を貸せよとも何んとも言はずに負ふて遊んで居つた、親もよいことにして置いたはよかつたが、其内に負ふたまゝ山を越えて畑野へ出てしまつた、兒の親はそんなことは知らず、其處らに居るものと思つて尋ねに出て見ると何處にも居らぬ、心配でならぬ故山下りの人に問ふと、それでは某であつたかも知れぬ、子を負ふた者が彼方へ行つたと云ふので大騷ぎになり、近所合壁手分けして探したが居らぬ、まさか山越えして國仲へは出まいと

は思つたけれども、念の爲め小倉から畑野邊を尋ねると、某は昨日泣く兒を負ふて居つたと云ふものが有つたから、段々尋ねて見ると、新穗へ行く道端に兒を抱いて自分の乳を呑ませて居つたと云ふ。

紅葉山人の汗ふき別れの跡

文豪尾崎紅葉山人の句碑が二三ヶ所も建つさうで、其中にて山人が汗を拭いて貰つてお糸と別れた場所は、小比叡の何とか坂であるから、其處にも建てると云ふことが新聞に見えたので…まてッ其別れ場所はたしかに村山である筈だが…夫では私の聞き誤りであつたかしらと思つたから、念の爲め調べて見たが、矢張り村山に相違ないのである。

紅葉山人が小木へ來られたのは、明治三十六年の七月で三十三歳の時であつた、然うして又小木を去つたのも同年眞夏の暑い時であつた、山人は小木ばかりはどうしても離れられ〳〵ない思ひがしたけれど、いつまでも居る譯には行かないから、勇を鼓して出立したのである。而して山人が滯在中眞情込めて旅情を慰めたお糸さんと云ふ情婦の有つた事は、周知の通りに候也であるが、亦第二のお氣に入りの人があつた、それは濱町の菓子屋村川清藏で、菓子屋々々々と呼び寄せて話相手にしたものであつた、其樣の間柄であるから送りに出たのは言ふまでもないことである。乃で山人は人力車に乘り、其右にはお糸左には菓子屋が附き添ひて話をしながら歩いた、尤も外に二三人送りに出た者もあつたれども、其者どもは小比叡あたりで別れて歸つたが、兩人は別れうともせないで村山まで來た、然うして三階（安福爲藏）と云ふ旅人宿へ曳き着けると、山人は下車したが、汗をだく〳〵流して居つた故、それを菓子屋は扇子であふぐ。お糸は手巾で山人のぼんの頸のあたりの汗をふいた、夫から二階で別れの酒宴をした、此時山人は菓子屋の扇子を取つて、これに彼の「汗なんど拭いて貰うて別れけり」の一句を認めて投り出した、この又扇子と云ふのが振つたもので、祝儀扇子の然も粗中の粗扇であつたが、夫を菓子屋は愛藏して居つたさうだが、今は不明になつたらしいのである、（是は後の話）然うして別れ盃はしたものゝ、そんならと云ふて其處の前で左樣ならと直ぐ別れられる樣な單純の間柄ではないので猶お糸は山人の袂について二三丁行くと、ダマ（村山）と云ふ家の下手道の東側に大きな笠松が一本ある、丁度傘を開いた如き形の松で、下はしだ草できれいで涼しい所である、此處で二人は足をとゞめ別れを惜んで小半時も無言で居つたけれども、さすがに又小木へ歸られもせず仕方なしに惜き別れをしたのであつた（其菓子屋の直談を聞きたる人の談）

猶山人の佐渡の旅日記と云ふものは、半紙を綴つたものであるが、其中から要點を拔抄すると此樣のことが有る「別れの場所は村山の三階と云ふ旅店で、それから二三丁にして孤松がありて此處まで人々に見送られた」云々「そこは松が繁つて居つて自分は別れた積りで後を振り返つて見ると送つて來た女が松の間に見えた」云々「小比叡の入口附近にはそんな位置はない」云々と有るから菓子屋の談と合ふて居るのである。

物言ふた猫

家族は皆就寢てしまつて嫁さんが一人殘り、そこらを片付けてから爐の側へ寄ると、艾猫（よもぎ色の猫）が一聲ニヤーンと鳴いてから姉さんと呼んだ、嫁さんは誰も居らぬに誰であらうと思つて見ると、夫が猫であつたのに驚いて、不用意にハイと返事をすると、姉さん私が踊つて見せませうかと言ふ、乃で否むもどうやらと思つた故、オウ艾猫踊つて見せよと云ふと、それじや姉さん其手拭を貸して頂戴よと、嫁さんの肩に掛けて居つた白手拭を取つて之を頰かづきにし、さて後足二本で立ち、手を振つて變な身振をして踊つて見せたと言ふ話を聞いた事があるが、是はその話に似た話であるから一寸左に書いて見よう。

是は昔のことであるが、西三川の芳が平の市郎平方に老猫が居つた、夫はよい猫で梁の上に居る鼠などは一つ瞰まれると竦んで落ちたさうであるし、當地方の習俗で十月の亥の日を亥の子と云ふて、亥の子餅と云ふ牡丹餅を何處の家でも拵へるのであるが、猫は大抵牡丹餅は食はないものであるから別に飯をやることになつて居るのである、然るに或年偶々此日に限つて殘飯も無かつた故、嬶が今夜は困るなア、牡丹餅ばかりで艾にやる飯が無ふてと云ふと、側に居つた其猫が、嬶さん飯は入りません、私も其牡丹餅を食ひまさアと云ふた、家內一同顏見合せて驚いたが、そんならさア食へと云ふて遣ると喜んで食ふた故、取つてはやると米一升で二十個位しか出來ぬ大きさの餅を七個食ふて、而して眠つたが、翌朝から姿を見せぬ樣になつたさうである。

馬場の釜煎り

「小比叡陣だか兵右工門事か、又は馬場の釜煎りか」（下句を＝「但しや馬場の繼事か」＝「さては馬場のまゝ事か」の二說あれど暫く自分の耳學傳說の「又は馬場の釜煎りか」に從ふ）

これは其頃の三大騷動を歌つた俗謠で「小比叡陣だか」は辻藤左工門が小比叡山に籠城否籠寺戰爭「兵右工門事か」は代官奧野七郎左工門が、四日町の美人源左工門お初に於ける失戀騷動で、この二

件は皆樣先刻御承知のことであるから拔きにして、不明に屬する馬場の釜煎傳說の一篇を言上すると斯うである。

昔畑野とか三宮とかに、先妻の遺兒を虐待する惡鬼の如き繼母があつた、お上で之を釜煎りの極刑に處して、他の繼母の誡にしたことがある、乃でお上では之を捕へ牢に入れ置き、さて佐渡全國に令して曰く、何月何日馬場の原に於て惡繼母某を釜煎りの刑に處するから、繼母たる者は缺けなく、當日は油を三合づゝ持參せよ、見物を許すから萬一命に背く者ある時は同刑に處すと、さア大評判となり繼母達は大いに恐れ、其日になると皆誘ひ合ひ油三合づゝ持參して集まり、其油を釜に注ぎ込み火を焚き立てゝ其惡繼母を釜に投り込み、釜煎りにしたるを强いて見物せしめたが、その苦悶の形相の恐ろしさを見て皆慄ひ上り、是に依つて繼子虐めの惡風は矯正されたと云ふ。

弘法大師樣の御德痘痕女に及ぶ

前佐渡に村の名も家の名も忘れたが、或家の嫁と云ふものは、物を人から貰ふことは好きだが、くれると云ふことは曾て一度もしたことの無いと言はれる評判の慾嫁であつた、乃で弘法大師樣はそれを直したいと思召して、堂坊主の如な破法衣を着て三四度托鉢に行つて見たが、いつも何も吳

れる物が無いと云ふて施したことは無かつた。或日亦行つて乞ふて見たが例に依つて吳れない故、すご〳〵と去つたのである、此時其家で丁度餅を搗いて居つて、嫁のおせんがその相取りをして居つて、坊さんが何も貰はで行くのを見て痛く氣の毒に思ひ、何か施したいと思へども、慾の姑嫁が居るのでどうすることも出來なかつた。いろ〳〵考へて遂に名策を案出し、ウムさうだと心にうなづき、相取しながら誰も氣付かぬ樣に密に餅を少しばかり切つて、相取湯の中にかくし置き（小桶に湯を入れその湯を手に附けては餅を相取りする湯をあいどり湯と云ふ）然うして早速搗き終げ鉢に取つて、サアお母さん搗けましたと渡し置き、先きの相取桶を持ち裏口から出て坊さんの後を汗を流して漸く追ひつき「御出家さんつまらぬ物でも私の志ですから召あがつて下さい」と、彼の餅を湯の中から出して施げると、坊さんは大層喜んで禮を述べ、而しておぜんの顏を見ると、一面の痘痕で心は美しかつたが顏は醜の方であつた、おせんは坊さんに顏を見られたるのだから、耻かしくなつて伏目になつた（おせんは痘痕で醜顏の爲め夫君に嫌はれ氣味であつたのだけれども、至つて優しい女であつた故、不平も出さずに暮らして居るのであつた、おせんは夫君の其心を察して居る故、非常にそれを苦に惱んで居るのであつた）坊さんは法衣の袖から古手巾を取出して「姉さんお前はまア私に追付かうとて大層汗をかいて居るが是で拭きなさい、スツカリよい心持になります

から」と、流石に是で拭くとアバタが除去るとも言ひ兼ねたのであつた、おせんは勿體ないと辭するを、「イヤ遠慮は無用早く拭きなさい」と強いられて、それではと手に取つて拭いたが、坊さんはこゝも拭けそこも拭けと差圖して、限なく顏をふかせて辭去した。おせんは何んだか顏がスカ〳〵する樣であつたが、急いで歸り知らぬ顏で又裏口から這り、切角後仕舞する內に日は暮れて、姑嫁は夕食に餅を食ふべく膳立して、家內一同膳に向ひ箸を採つたが、姑も夫君も不思議さうにおせんの顏を見るのであつた、おせんは亦今夕に限つてどうして俺の顏を見るのであらうと、不思議でならなかつた、顏を赤くして居ると、姑嫁が「おせん」と呼んだ、おせんはハットして不用意に「ハイ」と答へると「おせんお前どうして顏のアバタを無くした、藥でもつけたか容貌よしになつたが」と問はれた、おせんは顏を赤らめて「厭やだァお母さんは揶揄ふもの」「誰が揶揄ふものか」「でもどうともした覺えはありませんもの」と云ひつゝ顏を撫でて見ると觸感が違ふのであつた、無口の夫君が側から鏡を見よ〳〵と云ふから、シブ〳〵立つて鏡に向ふて驚いた、ハテどうして痘痕が除去たであらうと不審でたまらなかつた、姑嫁は如何したのだ言へ〳〵と責めるのであつたが、此時おせんが思ひ出したのは先刻の汗ふき手巾のことであつたが、是は大變の事になつた、今度は白狀しても去られる、せでも去られると決心したから誠にすみませんが實は斯々と遂に不殘白狀したけれども

別に怒る樣子もなく、夫ならあの坊さんは弘法大師樣であつたかと、皆なが去つた方を伏し拜み、姑嫁も前非を悔いて謝罪し、其後は慈善深き人になり、おせんは美人になつて夫君に可愛がられて一生繁昌榮えたと言ふ。

小立の機神さん

只昔とのみ聞いたゞけでいつの頃か分らぬが、小立は運上野の下の濱へ異形の船の樣の物が漂着したと云ふので、我先きにと近鄕の者が寄集つて見た、或老人が云ふには、是はウトウ船と云ふもので暴風に逢ふても顚覆もせねば水も入らぬもので、罪人を乘せて流す船であると說明してくれた中をあらためると如何にも上品の若い綺麗の貴婦人が、袖の長い廣い樣な立派な衣裳を着て打伏して居つた、人々は只ワイ〳〵騷ぐばかりで、どうせうと言ふものは無かつたが、其內に小立の伊八と云ふ人が來て見て憫然に懷ひ「姉さんお前斯うして居ると死にますが、どうです俺の家へ行きませんか、助けてやるから」と云ふと分つたと見えて貴婦人は細い白い手を合せて賴む心を示した。ヨシヨシ俺に負はれよと、背を出して負ひ自分の家に連れて來て白彌煮て梅干を添へ食はせたが疲勞し切つて居る故當座は物も言はず寢て居つたが、其內にだん〳〵力附いて來て、田舍の人などに

は分らぬ上品の遊ばせ言葉で少しづゝ喋べる樣になつた、伊八はソロ〳〵話しかけ、「姉さんお前は何處の者でどうして流されたのだ」と訊くと貴婦人は顏を紅めて「妾は故あつて所も家名も申上げることを憚かるから御免して下さい、夫で名は岩の井と申しまして年は十八になります、或る無上方に宮仕へして主君の寵愛を受けて居りましたが、朋輩の嫉みを受け讒言に依つて無實の罪で斯樣に流されました、夫れでも船に百日分の食物を入れて呉れましたから飢は致しませんでした、然うして沖で隨分大暴風に逢ひましたけれども觀音樣の御加護で無事なる事を得て此處へ着いたのですが、一体此處は何と申す所でありますか」と問ふから「此處は佐渡の國で小立村と云ふ所である」と聞かせた、さうすると大層驚異の顏色で「はア佐渡、佐渡ですか、佐渡は鬼の住む嶋と聞いヤ姉さん其の心配は尤もであるが、佐渡は罪人を島流しする所になつて居るから、さう聞いたであらうが決して鬼は一匹も居らぬ、普通の人間ばかり住んで居るので、人を取つて喰ふ樣の事は無いから安心して居りなさい」と諭すを聞いて始めて安堵した樣子であつた。彼是する內に早二三ヶ月も過ぎた、伊八は或日又女に向つて「姉さんどうです此の樣なむさ苦しい不自由な家でも、お前が居る氣なら一生置いてやるが、夫でも又國へ歸りたいか」と訊いた所「イ、エ妾は父母が居るではなし、兄弟があるではなし、又元の所へ歸られも致しませんからどうぞ御當家にいつ迄も置いて頂きたい」と請うた、「宜しい然らば一生居るがよい」と云ふことになつて百姓の荒仕事は出來ず、猫を相手に留守居などさせて置いたが、月日に關守なしで早二三年過ぎて仕舞つた、或日思ひ出した樣に「御主人樣」と何か大事な用事でもある樣な口調で呼んだ故、伊八も又何を言ひ出すかと思つて女の顏を見て、「ハイ何か用があるのか」と訊くと、「妾は斯うして遊んで居るのも氣が詰るばかりですが、實は機を織る事を少々心得て居るのですが、試に何か織らせては下されまいか」と言ふのであつた、伊八は喜ばしげに、「ハアさうか夫は何より結構な事が出來てよい」と俄に機具それ糸と設備して遣ると、夫は〳〵見事な機を織つたので、イヤ伊八とこのあの姉さんはエライ立派な機織だちうが俺も敎はりたいのうと言ふ者が二三人出來た、そこで伊八に相談して賴むと心易く承諾したので、近鄕の娘達は多く集つて敎へを受けたが、其內に三十歲ばかりの時病死したので皆惜しんで厚く葬式を行ひ、然うして機神樣に祀つて運上野に塚を築いた、今あるハタ神さんはそれである。

附記　一傳說に小木の木崎神社の御祭神である木花開耶姫は絕世の美人であつた故君寵を一身に集めて居つた所から、他の多くの宮女に嫉まれて機智に長けたる一宮女が密に柏の實を一個姫

の座下にころがし込み置きたるを知らず、立上らんとせし時之を膝にて敷き潰し、ピチツと音のしたるを、サア姫は恐れ多くも君側でお屁をしたと讒奏し遂に小舟に投じて流され、小木に漂着したもので、之を祀つて后神社としたのである、故に同社氏子は柏の實を食すると腹痛すると云ふさうであるが、機神さんと此傳説との筋書がよく似て居るが、一字の違ひであるから小木と小立と間違へられたものかどうか判らぬ。

再び丸山の大師に就て

多田丸山正隆寺の開眼入らずの大師さんの石像は小泊では彌助の作だと云ふて居るが、椿尾には又かういふ傳説がある、五平が其大師を切る時如何した機であつたか、大師が背に負ふて居る苞（本當の名稱を知らぬ故苞として置く）の部を遂ひ切り落して仕舞つた、五平は是を苦にして食事もせず二日も三日も寢て居る、弟子は大層心配して枕元に至り「親方さんどういたしました病氣でゞもありますか」と慰問したれば起き上り「いやお前にまで心配を掛けてすまなかつたが、實はあの大師さんの苞の部を切り欠かしたので、あれを置いて又別に切り替へるのも殘念で、それが苦勞で寢たのであるが、どうすればよいやら」と語つた、弟子は之を聞いて「親方さんの苦勞になさるのも御尤もでありますが、夫れでは其包だけを別に拵へてうまく穿り込んだならば差支えないではありませんか」と云ひたれば、五平大いによろこび『よく其工夫を考てくれた』といふて、弟子に手傳はせ別にその包を拵へて塡り込んだが、よく改め見れば判るけれども一寸見ただけでは少しも知れぬといふ、而して此弟子こそ誰あらう、彼重太郎の青年時代であつた、重太郎で無ければ　この智惠が出ねば細工も出來まいとの事である、サアかうなると彌助の作であるか五平の作であるかゞ研究問題である、イヤ五平の作を云へば、今椿尾の藥師堂にある數百の石像は立派のものである。

昭和十三年九月二十五日印刷
昭和十三年九月三十日發行

定價金六十錢
（送料六錢）

著者　不苦樂庵主人

印刷者　新潟市本町通九番町　早福勉

印刷所　新潟市本町通九番町　早福印刷所　電話三〇四〇番

不許複製

發行所　新潟縣佐渡郡眞野村大字新町
池田商店出版部
電話眞野四十五番
振替長野四〇一二番

池田書店出版案内

佐渡の史蹟（四六版二百餘頁）定價金五拾錢（送料金六錢）
順德天皇と佐渡（四六版二百餘頁）定價金五拾錢（送料金六錢）
佐渡の昔噺（四六版二百餘頁）定價金六拾錢（送料金六錢）
佐渡おけさ節（踊方説明入ポケット版美本）定價金貳拾五錢（送料金六錢）
佐渡旅行案内地圖（名勝案内入）定價金拾五錢（送料金參錢）
日蓮上人佐渡の歴史（集印帖折本式美本）定價金參拾錢（送料金四錢）
（振替前金御注文は送料發行元負擔）

◎其の他史蹟風景及びおけさ繪葉書貳拾餘種刊行
島内書籍店、土産物店にて販賣致し居り候

佐渡國眞野新町
池田商店出版部
電話眞野四五番
振替長野四〇一二

7
14
751
146

7
14

751
146